吹部　県や全国へ躍進

「高高らしさ」見せる

群馬県アンサンブルコンテストが、11月25日にかぶら文化会館ホールで行なわれた。本校は、打楽器アンサンブルが金賞で西関東大会出場、木管八重奏と金管八重奏が銀賞という結果になった。

そこで、金賞を獲得した打楽器アンサンブルのリーダーである藤本一成くん（2の7）に話を聞いた。まず、金賞を獲得した感想を聞くと、「県大会で金賞を獲り、そして県の代表になることができて素直に嬉しい。これまで自分たちをサポートしてくださった方々に感謝したい」と喜びと感謝の気持ちを語り、「西関東大会でも、全国大会出場を目指し、さらに良い音楽を創り上げたい」と、今後への決意を述べた。

横須賀芸術劇場前で記念撮影をする吹奏楽部

また、全国ポピュラーステージ吹奏楽コンクールが、12月23日に横須賀芸術劇場で行なわれた。本校は、高等学校の部に出場し、高高らしいダイナミックな演奏をした。

そこで、吹奏楽部部長である飯嶋正平くん（2の4）に話を聞くと、「結果は形に残るような賞を頂くことは叶わなかったが、会場で私たちに特有の雰囲気を醸し出すことができた。夏のコンクールに向けて頑張りたいと思う」と大会の感想と今後への意気込みを語った。（樋口善）

高高生お年玉事情

電子マネー化進む兆し

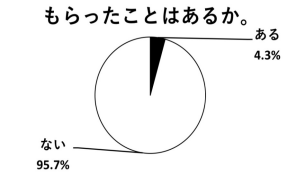
電子マネーが浸透し、お年玉の電子マネー化も進み始めている。そこで、高高生のお年玉の電子マネー化について本校の生徒1、2年生を対象にアンケートを行なったところ、69件の有効回答を得た。

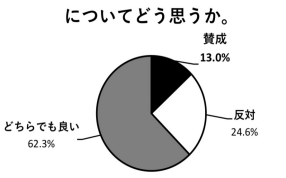
最初の質問は「お年玉を電子マネーでもらったことはあるか」で、9割を超える生徒が「もらったことはない」と回答した。高高には、まだお年玉の電子マネー化はあまり普及していないことが分かった。

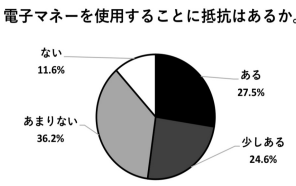
次に、「お年玉を電子マネーでもらうことについてどう思うか」という質問をした。結果は、「どちらでも良い」が過半数を占め、「賛成」と「反対」が約1対2に割れた。賛成の理由として、「お金を無くす可能性がなくなる」、「遠い場所にいる親戚にも渡せる」という回答や、「うまく使えばポイントがつく」等の回答があった。また、反対の理由には、「電子マネーを使わない」、「現金の方がありがたく受け取れる」などの回答が見られ、多くのメリットやデメリットがあることがわかった。

最後に、「将来お年玉を渡す立場になった時に電子マネーで渡すことに抵抗はあるか」という質問には、「ある」、「少しある」と、「ない」、「あまりない」の回答が概ね半分に分かれた。

高高でのお年玉の電子マネー化はあまり進んでいない。現金、電子マネーのどちらにもさまざまなメリットやデメリットがあるため、お年玉の電子マネー化は議論の余地があるだろう。（樋口大）







矢内くん関東出場

将棋部

令和5年12月24日に高崎工業高等学校で、第34回関東地区高等学校文化連盟将棋大会が行なわれた。

高高からは、将棋部部長である矢内悠翔くん（2の2）が出場した。

結果は、奮闘の末惜しくも一回戦敗退となった。

そこで、今回の大会について矢内君に話を聞くと、「調子を合わせることができず、不本意な結果になってしまい残念だった」と振り返った。

今後の目標については、「個人としては全国大会優勝を狙っている。部としては全国大会への出場を目指している」と述べた。（荻野）

観客に音楽のプレゼント

クリスマスコンサート開催

12月26日に翠巒会館で、マンドリン部、吹奏楽部、和太鼓部によるクリスマスコンサートが開催された。演奏はマンドリン、吹奏楽、和太鼓の順番で行なわれ、多くの観客を魅了した。

マンドリン部は、弦楽器の奏でるハーモニーを活かし、幻想的な空間を作り上げた。続く吹奏楽部は、強弱のコントラストが効いた打楽器五重奏からスタートし、「マツケンサンバⅡ」などの軽快な曲で観客を大いに盛り上げた。

また和太鼓部は、2年生が「龍吟」を、1年生は「天地」をそれぞれ演奏した。どちらも統率のある動きと、太鼓の力強い音色で観客を圧倒した。

今回のコンサートに関して、各部長に話を伺った。マンドリン部部長の吉田くん（2の7）は、「1月に控える県大会で演奏する『柱の鼓動Ⅶ光の風景』を含む全ての曲を演奏できて良かった。しかし、演奏中にミスをする場面もあったため、県大会に向けてさらに良い演奏になるよう練習していきたい」と振り返った。

「龍吟」を演奏する和太鼓部

続いて吹奏楽部部長の飯島くん（2の4）は、「まずは、今年も地域や保護者の皆様、先生方のおかげで無事にコンサートを行なうことができたことに感謝したい。今回の最大の反省点は、運営の発足が遅れてしまったことだ。その結果、先生方にも迷惑をかけてしまった。この反省を糧に、後輩たちにはより良いコンサートを開催してほしい」と思いの丈を語った。また、「演奏も、自分たちの実力を出し切ることができず悔しい。いつでも全力を発揮できるよう、基礎力の向上に努めたい」と決意を述べた。

最後に、和太鼓部部長の川越くん（2の1）は、「今回は、チケット制でコンサートを開催したが、観客の人数が我々の予想していた以上に少なかったことが反省だ。今後はより人数を増やせる開催形態を取れるようにしたい」と全体の課題と、次回への思いを話した。（新井そ）

高高生のつぶやき

1636　星名　和彦

「中国政府には、科学的根拠に基づいた行動をとってもらいたい」松野官房長官は記者団を前にして重々しく口を開いた。8月24日、福島第一原発に貯まる放射線物質のトリチウムを含む汚染水が、薄められて海中に放出されたことを受けて、中国政府は日本水産物の輸入を包括的に停止した。しかし、国際社会は、この中国の行動は昨今のデモや抗議集会にも表れている当局への不満を外国に向けることが狙いだと指摘している。この事実は、かつてナチス・ドイツが経済危機から脱する原動力を生み出すために行なったホロコースト（ユダヤ人大量虐殺）と目的を同じにする政策を中国が今まさに行なっている可能性があるということを示している。事実ならば国連憲章に対する冒とくであり、断じて許されない行為である。

このような排他的な風潮は、自らが何らかの集団に所属していると強く認識することで起こる。その集団は人間から冷静な判断力や責任感を奪う。自分が所属している集団も本当は自分の頭の中で構築した幻の可能性もあるのに、そんな空虚なものに依存し、自らが負うべき責任の所在を求める。これが集団心理が引き起こす短所であることが心理学者によって指摘されている。

集団の存在は個人に過大な力が与えられていると誤認させることがある。その空虚な力を根拠に、大きな気になって傍若無人な行動を取る人がいる。その人は一度立ち止まって自分の行動を見直してみるべきだ。集団心理の短所を克服し、責任感ある行動を取れる人材。それが、これからの社会で必要とされる人材だと私は信ずる。過度な国民主義、または全体主義という集団心理から世界が抜け、各々が自ら判断し、理想的な判断が下せるようになったとき。その時が理想郷（ユートピア）形成の時だ。

今、我々は変わらなくてはいけない。古臭い伝統に固執し、冷静な判断ができない人は愚かだ。世の人が自立した個を持ち、自ら判断を下せるようになる時代。我々が精神的に自立した時代に、現在世界に存在する様々な問題は解決されることだろう。その時代をつくるのはほかならぬ我々だ。このことについて、今一度一人ひとりが考えてみるべきだ。個人の考えが集団を変える。この事実を認識してほしいと思う。